

タイの仏教に学びたいこと

大本山総持寺安居 水野克彦

現在の私は、タイ仏教が属するところの南方

上座部仏教（いわゆる小乗仏教）についてほとんどと言っているほど知識を持ち合わせていない。ただ、私自身が南方上座部仏教の教えとして知っていることと言えば、学生時代に学んだ「自己を完成するための教えである四諦八正道をもつてその根本教理とし、その四諦八正道の完全な理解が得られれば、自己が完成されるとともに、それはやがて他の人びとを救済する助

けにもなる」と言う事だけである。

さて、仏教と一口に言っても、国や地域によってそのありようがさまざまに異なっているのが今日の現状である。釈尊の原始仏教から部派仏教・大乘仏教と発展し、かつさまざまな地域に広がりを見せた仏教であるが、大きく分類すると南方仏教（南伝仏教とも言う）と北方仏教（北伝仏教）に分類される。

そのうち、北方仏教とは、西北インドから中

中央アジアを経て中国に伝えられ、さらに朝鮮半島、日本へと伝えられた仏教である。中国において翻訳され、流布した多くの仏典はそのほとんどが大乗仏典であることにより、北方仏教は「大乗仏教」とも呼ばれている。それに対して南方仏教とは、スリランカ（セイロン）・ミャンマー（ビルマ）・タイ・カンボジア・ラオスなどの東南アジア地域に行なわれている仏教であり、外形的には原始仏教や部派仏教の多くを伝えている仏教である。



このように仏教の教えが広められた地域によってそれぞれの仏教は多少異なり、またそれぞれの地域において独自の発達（変容）を見ている。一例を挙げてみよう。重要な仏教の修

行法として「六波羅蜜」と「十波羅蜜」とがある。大乗仏教は六波羅蜜（一）布施、（二）持戒、（三）忍辱、（四）精進、（五）禪定、（六）智慧）を重視するのに対して、南方仏教は、これに四つ（七）方便、（八）願、（九）力、（十）智）をさらに加えて十波羅蜜をたてることである。

現在私は、北方仏教に属する日本仏教のうちの曹洞宗に僧籍を置く者の一人である。本来ならば曹洞宗の教えを身につけ、それをもって布教するのが私の役目であるが、それでは、仏教の原点である原始仏教を良く理解せぬまま、北方仏教（大乗仏教）のみをもって布教して行くことになる。私はむしろ、釈尊の原点をもふまえた思想や教えをもって布教することが大切ではないかと思う。そして、仏教を単なる理論としてではなく、自分の身体で体得し、おのが身につけることがこれから先、出家者（宗教家）として人生を歩んで行く私にとって重要なこと

ではないかと考える。

私たちの曹洞宗は、周知のように、道元禪師によつて開かれ、瑩山禪師によつて一般の人々に広められた一宗派である。また、坐禪をひたすら実修することによつて悟りを自覚する、つまり「只管打坐」の禪を主唱する宗派である。しかし、本山等における現状は、ただ僧侶の資格を手に入れるために安居する者が多くなつてきている傾向はいなめない。事実、私もそのような資格を取るために本山僧堂に安居した一人である。

送行して初めて気が付いたことがある。それは、真の出家者としての自己ができあがつていないことである。僧侶としての資格はあるのに自己が未完成というのは、実際おかしいことである。以前私は、法要を行ない御施主さんに手を合わせて見送られたことがある。その時自分に対して情けないと思つた。若い僧侶なら一度

は感じるのだと思う。それは形式だけの法要を行なうからである。

現在日本における仏教は形式的な側面が顕著で、出家者としての本来の道を失いつつあるのでは：と思う時がある。法衣を身に付け、浄髪をしてゐる者ならば、それなりの自己完結が必要である。在家の人たちは、法衣を身に付け、浄髪をしてゐる姿を見れば、その者を一人前の僧侶として待遇するであらう。かれらの待遇に甘え、法要のみを形式的に行なうだけでは出家者として失格であると思う。このようなことをいく世代も続けて行けば、日本の仏教は、だめになるであらう。

それゆえ、私は仏教の原点である南方仏教そのものを少しでもおのが身体で感じる必要があるのではないかと考えた。もちろん法式・声明・葬儀の仕方を覚え、行なうことも大変重要なことである。が、その前に真の出家者としての自

己を確立することが、第一であると考ええる。そのためには、タイに赴き、「四諦八正道をもって自己を完成し、真の自己を完成させるとともに、それはやがて他の人びとの救済のための助けとなる」という南方仏教の理念を少しでも体得することが自分にとって急務であると考ええる。さらに、そのことはこれから自分が出家者として人生を歩んで行く上で大いにプラスになることでもあると思う。

本来僧侶という者は、世の人々の心の支えとなり、かれらの精神的な悩みについての良きアドヴァイザーであることを本来の役目とするものである。もちろん世の人々が成仏できるようにとねんごろに供養するのも僧侶としての責務であろう。

そのために、まず私は、出家者としての自己を確立させるために、釈尊の教えにより近い南方仏教の現実をまのあたりに見て学び、そして

みずからのものとしたいと念じて、善光寺育英会のタイ国派遣留学僧を希望する次第である。

